

# SHOW HEY シネマルーム



## Data

監督・脚本：山田洋次  
出演：吉永小百合／笑福亭鶴瓶／蒼井優／加瀬亮／小林稔侍／加藤治子／笹野高史／森本レオ／小日向文世／石田ゆり子／田中壮太郎／キムラ緑子

## 👁️👁️ みどころ

よくできた利口な姉と、でき損ないのどうしようもない弟。吉永小百合と笑福亭鶴瓶が見事にそんな凸凹ぶりを見せてくれるが、その中で山田洋次監督が描くのは、家族の絆。「神聖にし侵すべからざる存在」色があまりにも強い吉永小百合以上に存在感を見せつけるのが、「主演男優賞ノミネートもあり！」と感じさせる笑福亭鶴瓶の演技。

家族はもとより地域コミュニティ、民間ホスピスと、見せられるのは理想像ばかりだが、めっきりイヤなご時世になっている今、たまにはこんな映画で心を洗ってみては、

## 大阪シネマフェスティバルでは連続して主演男優賞を？

本作は賢いお姉さん高野吟子と出来の悪い弟鉄郎を主役とした映画だから、吟子役の吉永小百合も、鉄郎役の笑福亭鶴瓶も実にハマリ役。とりわけ、笑福亭鶴瓶は同じ山田洋次監督の『母べえ』（07年）で吉永小百合のおじさん役としていい味を見せていた（『シネマルーム18』236頁参照）から、かつての吉永小百合＋浜田光夫の純愛コンビのように、既に2人の呼吸はピッタリ？

本作の表看板はもちろん日本を代表する大女優吉永小百合だが、『おとうと』というタイトルからわかるとおり、本作の主役はどちらかという吉永小百合より笑福亭鶴瓶？『母べえ』の他、『奈緒子』（07年）『映画クロサギ』（07年）『同窓会』（08年）『私は貝になりたい』（08年）など近時多くの映画に出演し、西川美和監督の『ディア・ドクター』（09年）では主役をつとめた笑福亭鶴瓶はそれぞれの作品でホントにいい味を出している。ちなみに、来る3月6日～7日に開催される第5回大阪シネマフェスティバルでの

主演女優賞は『大阪ハムレット』(08年)の松坂慶子でキマリ(?)だろうが、主演男優賞は私は観ていないものの『ディア・ドクター』の笑福亭鶴瓶でキマリ?私は秘かにそう推測している。

『おとうと』は2010年の公開だから、今後大阪に関連した名作で、大阪に関連した男優の名演を見ることができれば話は別だが、とりたててそんな作品や男優が見当たらなかった場合、ひょっとして来年の第6回大阪シネマフェスティバルでも笑福亭鶴瓶が2年連続して主演男優賞の栄冠を?

## 家族とは?山田洋次監督が描く理想とは?

近時ミスタージャイアンツこと長嶋茂雄元巨人軍監督の家族をめぐる、長男一茂との確執が週刊誌を賑わしているが、私はその骨肉の争いの原因と実態を全く知らないし、あまり興味もない。それに対して、東京の郊外で小さな薬局を営んでいる吟子の家族は?

吟子の夫は病弱だったため、一人娘小春(蒼井優)が小さい時に死亡したらしいが、娘はグレることもなく順調に育ち、明日は晴れの結婚式。同居している義理の母親絹代(加藤治子)は認知症気味で、時々キツイ嫌味を放つものの、女ばかり三世代の家族仲は良さそうだ。さらに、明日の結婚式に参加する吟子の兄庄平(小林稔侍)夫婦らの様子を見ても、親戚関係は至って順調そう。つまり、しばらく音信不通になっている吟子の弟鉄郎さえ登場しなければ、家族関係はすべて順調というわけだ。しかし、もし明日の結婚式に鉄郎が登場したら?

そんな導入部を経て、前半のハイライトたる結婚式への鉄郎の乱入シーン(?)になるわけだが、これによって家族はバラバラに?いやいや、山田洋次監督が描く日本の理想的な家族はそんなに単純に壊れるものではないはず。結婚式での鉄郎の飛び入りのスピーチも、それに続く『王将』の熱唱も絶品だが、やっぱり一人よがりにはダメで、周りとの協調する能力を持たなきゃ。また、酒を飲んだら糸の切れた凧のようになってしまう自分を自覚しているのなら、多少の自制心を持たなきゃ。もっとも、それは過去姉の吟子が口をすっぱく鉄郎にお説教してきたことだが、それがままたまらないのが鉄郎。さて鉄郎の天衣無縫、傍若無人な振る舞いの中、吟子の家族はどうなっていくのだろうか?

吟子と鉄郎という姉おとうとの絆を軸として、山田洋次監督が描く理想の家族像を、本作でトコトン追求してみたい。

## この母娘にして、なぜこんな婿選びを?

本作の脚本は非常に良くできているが、私が一つだけ納得いかないのは、吟子と小春のような利口な母娘が、なぜ寺山祐介(田中壮太郎)のような婿選びをしたのかということ。薬局の一人娘が将来を嘱望される優秀な医師と結婚できれば、そりゃ理想かももしれないが、えてしてそんなエリート医師に変な奴が多いことは、吟子ほどの知性があればわかるはず。まさか、婿さんの人柄を十分調べないまま、肩書だけで小春の結婚を決めたわけではないはずだ。

結婚後しばらくして実家に戻ってきた小春の訴えを聞き、病院に乗り込んだ吟子と寺山

との会話を聞いていると、寺山の異常さ(?)がすぐに見えてくる。パンフレットによれば、「夫婦間での対話が必要だ」と述べる吟子に対して、寺山がシャーシャーと述べる「夫婦で向かい合って何の話をするんですか?」というセリフは、イブセンの『人形の家』の中の有名なセリフらしいが、いくら医師として優秀でも、こんな奴は夫として、また人間として最低!もっとも、ストーリー展開の早い時期にこんな風に寺山のダメさを観客に明らかにし、出戻りとなった小春とその幼なじみで大工をしている青年長田亨(加瀬亮)との地に足のついた恋を後半のストーリーの一つの見せ場にするを意図した脚本であることも明らかだから、まあよしとしよう。婚カツに励んでいる女性は、くれぐれも地位や職業、収入だけで男を選ばず、その人柄を見抜いて選ばなくっちゃ。

## こんな地域コミュニティはいつまで?

私は2001年4月に改装成った自社ビルたる西天満コートビルに事務所を移転した。そして以降、真面目に町内会の活動に参加しているが、これは土地建物の所有者として、この地域に住み生活している人たちとのコミュニティが不可欠と考えているためだ。しかし、西天満界隈を見廻しても、そんな地域コミュニティは希薄となり、大小多くのマンションでは隣りに住む人の名前も顔も知らないという人間関係が増えてきているはず。

しかし、本作を見れば、山田洋次監督が描く理想的な家族像と共に、理想的な地域コミュニティ像が見えてくる。そのキーマンは、近所の自転車屋の丸山(笹野高史)と歯科医の遠藤(森本レオ)。『寅さん』シリーズと同様、山田洋次監督は脇役の配置がうまい。下町の人気娘小春の結婚プレゼントを薬局に届けた丸山が遠藤と話すのは、「小春さんのハートを射止める男はこの町にいなかったのかねえ・・・」ということだが、そりゃ同じ町に住む高校中退で自転車屋の稼業を手伝っている丸山の息子より、エリート医師の方がいいに決まっている。しかし後半の展開を見ていると、根性のひん曲がったエリート医師より、近所で真面目に働いている大工さんの方がよほどまし。もっとも、いくら下町とはいえ、東京都内でそんな地域コミュニティが機能するのはいつまで?

そう考えると、なおさら守るべきものはできるだけ守っていかなければと思うのだが・・・

## 「みどりのいえ」は成り立つの?ここにも理想像が

日本では自殺者が遂に年間3万人を超えた。また、生活保護受給者数NO1の大阪では、生活保護の申請が今なお次々と続いているらしい。そして、一昨年末に話題を集めた年越し派遣村が昨年末にも実現したが、不況の続く世の中では失業者が増えるばかり?今なお経済不況から抜け出すことができず、中国の一人勝ちを許しているわがニッポン国では、家族から見放された鉄郎のような男が病気になるれば、後は行き倒れのみ?それはそれで仕方ないと私は思っているが、それではホロリとする人情話にならないため、山田洋次監督は東京都台東区にある「きぼうのいえ」をモデルとして、大阪の通天閣近くに小宮山進(小日向文世)が運営する民間ホスピス「みどりのいえ」を登場させた。

小宮山の話によると、入所者からカネをもらわなくとも行政からの補助金で何とか運営できているらしいが、それってホント?パンフレットには「きぼうのいえ」は「公的な補

助金はゼロで、運営は厳しい」と書いてあったが、それが実態では？小ぎれいなベッドと小宮山千秋（石田ゆり子）たちスタッフの温かい介護、そして談話室での語らい、静かに死を待つ入所者たち、本作が描くそんな「みどりのいえ」の姿を見ると、これも山田洋次監督特有の一つの理想形？生活保護費の上前をはねるような悪徳ビジネスが横行している世の中の現実を見ると、私にはそうとしか思えない。

ガンや糖尿病等あらゆる重病を抱えながら、最後まで口だけは達者な笑福亭鶴瓶演ずる鉄郎の「みどりのいえ」における最後は、独居老人の寂しい孤独死がたびたび報道される現実と対比すれば、何とも幸せなもの。山田洋次監督が描く映画だからこんな理想的な最後があるものの、「現実はこのものではないよ」ということを私たちは肝に銘じる必要があるのでは？

## 優等生には優等生役がピッタリだが

『まぼろしの邪馬台国』（08年）公開を記念して、スカパー！の『祭りTV！吉永小百合祭り』に2008年10月16日ゲストとして出演した私は、サユリストとしての私の意見を自由に語った。そこで私が強調したのは、全サユリスト共通の理解は、吉永小百合は天皇陛下と同じく「神聖にして侵すべからざる存在」だということ。したがって、夫に先立たれながら薬局を守り、女手一つで娘を立派に育て上げた理想的な妻であり、母親である吟子という役は実にピッタリ。また、でき損ないの弟鉄郎をどこまでも守り、助けていく利口なお姉さんという役もハマリ役。したがって、鉄郎の恋人だという女大原ひとみ（キムラ緑子）が突然現れ、鉄郎に貸した130万円を「少しでも何とかしてもらえませんか？」と頼まれた時の、吟子の対応は？また、自ら「もう顔も見たくない」と宣言して鉄郎との縁を切ったはずなのに、吟子が大阪で搜索願を出していたのは一体なぜ？

そんなこんな、あまりにもしっかりした優等生の吟子を、吉永小百合がまさに等身大で演じている。しかしそうであるため、本作で笑福亭鶴瓶が主演男優賞にノミネートされることがあっても、吉永小百合が主演女優賞にノミネートされるのはムリなのは、と私は思ってしまう。ちなみに、『北の零年』（05年）で吉永小百合が日本アカデミー賞主演女優賞にノミネートされ、『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）が12部門を独占する中、見事最優秀主演女優賞を受賞したのは、一体なぜ？それは、全国のサユリストを激昂させる、雪の中での強姦シーンに挑んだ香川照之の存在によるものが大きい。つまり、吉永小百合にもこんな汚れ役（？）ができるのだということを天下に知らしめたためだ。

そんな風に思うのは私だけかもしれないが、本作における吟子役は吉永小百合の優等生ぶりがあまりにもピッタリすぎているため、逆に面白味が少ないのでは？そんな思いがあるため、熱烈なサユリストであるにもかかわらず、私にしては珍しく本作は星5つではなく星4つ。ちなみに、おじさん役からおとうと役に变化した笑福亭鶴瓶との凸凹コンビの次回作は、きっと夫婦役？そうすると、そこでは吉永小百合も「神聖にして侵すべからざる存在」ではなく、いろいろと生々しい女の姿を見せてくれるだろうから、そこではまたしても主演女優賞にノミネート？

2009（平成21）年2月1日記